

書評 Reviews と 紹介

水口 政次
多和田雅保
栗生 春実
藤吉 圭二

世界のビジネス・アーカイブズ 企業価値の源泉

公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究
情報センター／編
日外アソシエーツ
2012／3 272p 19cm 3,600円

本書は、2011年5月11日に公益財団法人渋沢栄一記念財団が主催し、国際アーカイブズ評議会（ICA）企業労働アーカイブズ部会（SBL）と企業史料協議会が共催した国際シンポジウム「ビジネス・アーカイブズの価値—企業史料の活用の新たな潮流—」での発表を中心に、近年発表された優れた報告や論稿を加え、日本語に翻訳して1冊にまとめたものである。

本書の紹介に入る前に本書の構成について触れておきたい。

本書は、4部15章で構成されている。目次を示すと以下のとおりである。

『世界のビジネス・アーカイブズ』刊行にあたって

歌田勝弘（企業史料協議会会長、元味の素株式会社社長）

目次

本書で使われている社名の表記について

序章 世界のビジネス・アーカイブズ—
多様な価値を持つ、経営・業務に貢献するツール

松崎裕子

第一部 歴史マーケティングの力

第1章 より幅広い視野で一歴史的事実に基づく広報活動への支援

ヘニング・モーゲン（A.P. モラー・マースク社、デンマーク）[小谷允志訳]

第2章 フランスのビジネス・アーカイブズ、経営に役立つツールとして—サンゴバン社の事例

ディディエ・ボンデユー（サンゴバン社、フランス）[平野 泉訳]

第3章 日本における伝統産業とアーカイブズ—虎屋を中心に

青木直己（株式会社虎屋、日本）

第4章 アンサルド財団—アーカイブズ、トレーニング、そして文化

クラウディア・オーランド（アンサルド財団、イタリア）[中山貴子訳]

第5章 アーカイブズを展示することによる商業上の効果

ケイティー・ローガン、シャーロット・マッカーシー（ブーツ社、イギリス）[渡邊美喜訳]

第二部 ビジネス・アーカイブズと全国的戦略

第6章 資産概念の導入と中国における企業の記録管理へのその効果

王 嵐（中華人民共和国国家档案局、中国）[古賀 崇訳]

第7章 ビジネス・アーカイブズに関する全国的戦略（イングランドおよびウェールズ）

アレックス・リッチー（英国国立公文書

館、イギリス) [森本祥子訳]

第8章 インド準備銀行アーカイブズ—歴史資源そして企業資産

アショーク・カプール (インド準備銀行、インド) [大貫摩理訳]

第三部 アーカイブズを武器に変化に立ち向かう

第9章 誇りある遺産—買収、統合後の歴史物語の重要性

ベッキー・ハグランド・タウジー (クラフト・フーズ社、アメリカ) [松田正人訳]

第10章 企業という設定のなかで歴史を紡ぐ—ゴードレージグループのシナリオ

ヴルンダ・パターレ (ゴードレージ、インド) [宮本隆史訳]

第11章 合併の波の後—変化への対応とインターザ・サンパオログループ・アーカイブズの設立

フランチェスカ・ピノ (インターザ・サンパオロ銀行、イタリア) [矢野正隆訳]

第12章 アーカイブズに根を下ろして—IBMブランド形成に寄与する、過去の経験という遺産

ポール・C・ラーサウィッツ (IBM社、アメリカ) [後藤佳菜子、後藤健夫訳]

第四部 アーカイブズと経営

第13章 企業のDNA—成功への重要なカギ

アレクサンダー・L・ビエリ (ロシュ社、スイス) [中臺綾子訳]

第14章 会社の歴史—化学企業にとっての付加価値

アンドレア・ホーマイヤー (エポニック・インダストリーズ社、ドイツ) [安江明夫訳]

第15章 地方史か会社史か—多国籍企業海外現地法人アーカイブズの責任ある管理

エリザベス・W・アドキンス (CSC社、アメリカ) [松崎裕子訳]

あとがき 小出いずみ

参考：国際シンポジウム プログラム
翻訳者プロフィール

(注：訳者名は、紹介者が付け加えた。)

本書の帯に「地方自治体の公文書管理にも応用可能」とあったのを見て少々疑問に感じた。企業アーカイブズの本がなぜ地方自治体の公文書管理に応用できるか。企業と地方自治体とでは、類似点もあるがかなり相違点があるのではないかと思った。

「序章」で本書のバックボーンと思われる点に言及している。「組織が適切に記録を保存・活用することは組織の歩んできた足跡を跡付ける証拠を残すということである。従って説明責任を担保し、透明性を確保する観点から記録資料は社会的責任行動を確かなものとする価値を持つ。」もう一つの視点こそが、本書の重要なポイントであると指摘している。「記録資料としてのビジネス・アーカイブズは多様な価値を持つ、経営・業務に貢献するツールである。」このことをわかりやすく図示しているのが、図1である。図のいくつかの項目を行政的にアレンジすれば、かなりの部分で公的機関のアーカイブズの価値と重なる。親機関の行政運営に貢献する必要性は、公的機関のアーカイブズも同様であろう。今まできちんと認識していなかった視点かもしれない。

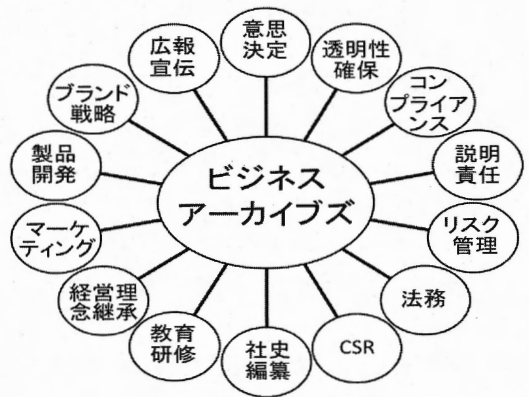


図1 ビジネス・アーカイブズの多様な価値(本書7頁)

最近のビジネス・アーカイブズ活動は、「歴史マーケティング」、「ストーリーテリング (物語を語ること)」、「プロアクティブ (積極的であること)」がキーワードであるという。

このキーワードは、目から鱗が落ちるような興味深い考え方である。

本書は、15本の報告・論稿が掲載されており、各報告・論稿のテーマが示すようにアーカイブズの価値をいかに企業経営に活かすかが共通の基盤になっている。アーカイブズの価値を企業経営者に認知させるかに努力しているアーキビストの姿が印象深い。

それぞれの報告・論稿には、世界のビジネス・アーキビスト達の「アーカイブズの現場」での果敢な行動記録が記されている。企業においては、経済状況や景気変動のためせっかくアーカイブズが設置されても、縮小ないし廃止に至る場合もあると言われている。そういった公的機関のアーカイブズよりもむしろ厳しい状況下で、アーキビストが少数でありながら組織内(幹部、社員等)に向けて、アーカイブズの有用性を認識してもらうためのエネルギーな努力が生き活きと記されている。

以下、本書の中で特に印象に残った記述を挙げてみる。「記録は前例の宝庫である。前例としてアーカイブズを使うことは常に有益なことであり、記録は組織の有益な記憶として役立ち、経営陣にとって重要な機能を果たしている。」「アーカイブズは組織の記憶であり、アーカイブズ資料は、財政的負担でなく、企業統治のための資産である。」「生命を持たない記録に命を吹き込むことは、全てのアーキビストにとって重要なことである。」

かつて公的機関のアーカイブズに働いていた人間として、本書を読んで考えさせられたことは、公文書館等が行政組織の中にその存在を認知させる努力をしたか、さらに親機関に対して、どのようにアーカイブズの価値を活かした行政運営への寄与を示したかである。

本書の事例に照らして、どこまで実践していたかを客観的に顧みる必要があるようである。企業、地方自治体を問わず、アーカイブズで働く人々にとって、本書は多くのヒント

が用意されていると思う。本書は、たいへん豊かな実践事例にあふれている。特に現場のアーキビストとして、何らかの理由で現状を打開する方法を模索している方々には、有効な情報が沢山詰まっている「考えるヒント」の宝庫であると思う。世界のビジネス・アーカイブズから日本のアーキビストに対する贈り物と言えないだろうか。

本書の帯に書かれているとおり、本書は地方自治体の公文書管理に応用可能であり、特に公文書館等の現場で働く人々にとって応用が十分可能であり、事例集として有用である。

最後に本書の内容が豊かで多岐にわたっているため、また紹介者自身の力量不足のため全般にわたった印象を述べるにとどまっている点について、ご了解をいただきたい。

〔元江東区区政資料室 水口 政次〕